

# 金 融 市 場 動 向

— 平成 6 年 7 月 —

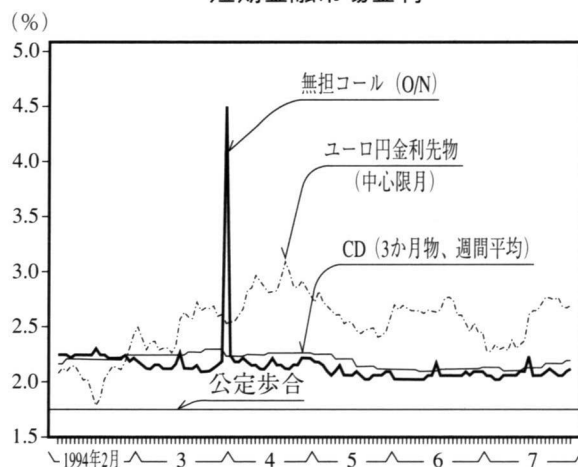
(平成 6 年 8 月 12 日)

## 1. 短期金融市場

7月中の無担コール・オーバーナイト物レートは、ほぼ横這い圏内で推移した。また、CD（譲渡性預金）3か月物レートは、中旬以降やや上昇した。一方、ユーロ円金利先物（3か月物、金利ベース）は、月初低下した後、月央以降強含んだ（なお、月央に限月交替＜中心限月：94年12月限→95年3月限＞）。

コール・プロパー手形市場資金平均残高（全国）は41兆9,292億円と前月（42兆2,111億円）比減少した。

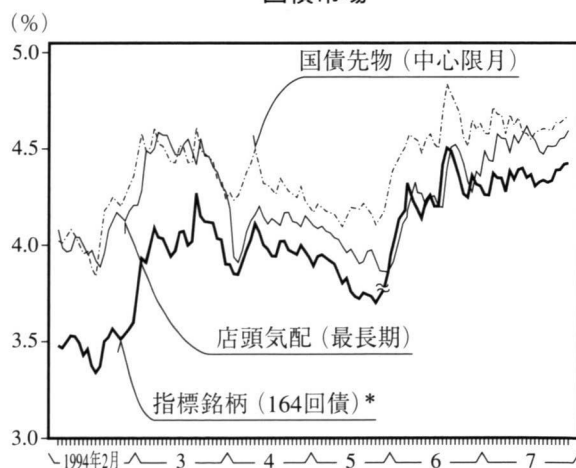
短期金融市場金利



## 2. 資本市場

7月の長期国債利回り（164回債）は、上・中旬中、模様眺め気分が強い中で小動きに推移、その後月末にかけては円高一服等を背景にやや上昇し、結局4.425%で越月した（前月末4.305%、国債先物中心限月利回りは4.672%＜前月末4.643%＞で越月）。国債の出来高は、現物（店頭取引）、先物ともに前月を下回った。

既発債市場利回り  
— 国債市場 —



(注) \*5月26日以前は157回債。

株式市況（日経平均株価）は、下旬に低下し、28日にはザラ場で約2か月半ぶりに2万円を割る局面もあったが、月末にかけて若干反発し、結局20,449円で越月した（前月末20,643円）。また、株式出来高（東証1部月中1営業日平均）は2.87億株（速報）と、前月（4.83億株）を大きく下回った。



起債動向をみると、長期国債（10年物、価格競争入札分）についてはクーポンレートが前月債比0.2%引き上げられた中、総じて順調な入札となった（7月27日入札分＜8月債＞は募入平均利回り4.346%、応募倍率2.35倍）ほか、短期国債についても、順調な入札結果となった（7月15日入札分＜6か月物＞は募入平均利回り2.087%、応募倍率2.31倍）。また、中期国債も順調な入札となった（7月7日入札分＜2年物＞は募入平均利回り2.356%、応募倍率6.93倍、7月13日入札分＜4年物＞は募入平均利回り3.089%、応募倍率2.66倍）。

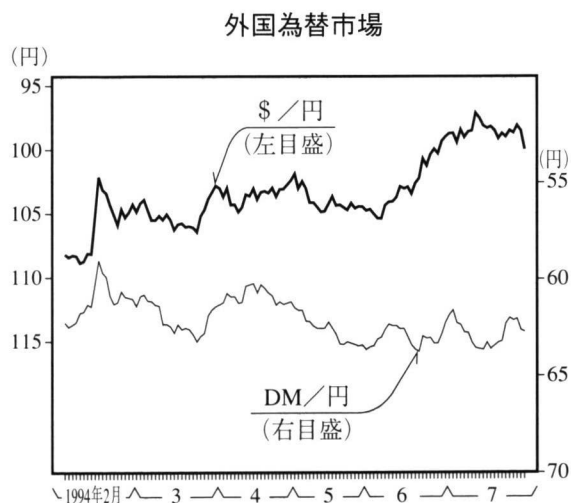
7月の国内公募普通社債は、1,850億円と

前月をかなり下回る発行となった（6月3,750億円）。一方、国内エクイティ市場での発行（7月払込み分、増資を除く）は、前月並みの水準となった（6月2,925億円→7月2,760億円）。

### 3. 外国為替市場

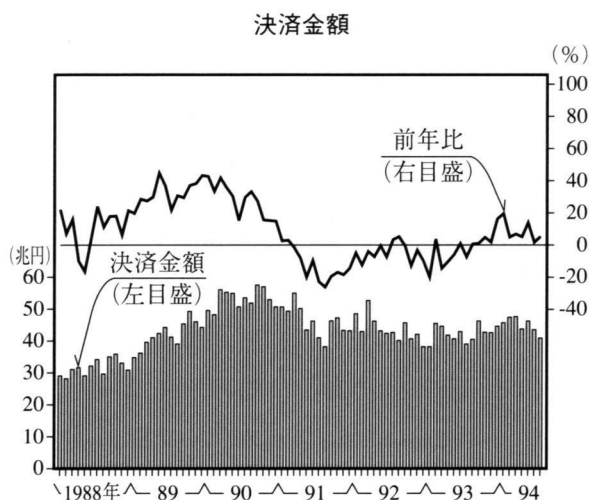
7月の円の対米ドル直物相場（東京市場、終値）をみると、前月末からの地合いを引き継ぎ98円台半ばと史上最高値圏で寄り付いた後も最高値を更新する展開となった（史上最高値：7月12日97.07円）。もっとも、その後はドル下攻め一服感が台頭、月末にかけてはほぼ1か月ぶりに一時100円台まで下落し、結局99.93円で越月した（前月末98.95円）。一方、円の対独マルク相場（東京市場、終値）は、月央にかけて下落したものの、その後反発し、結局62.75円で越月した（前月末62.28円）。

なお、東京外国為替市場の出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は130.3億ドルと、前月（161.4億ドル）を下回った。



#### 4. 決 済

7月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、手形交換高（東京）は前年同月を下回った（前年比△13.9%）一方、全銀システム取扱高（前年比+4.9%）、外為円決済交換高（同+13.6%）はそれぞれ前年同月を上回った。また、国債の決済金額（1営業日平均）については、移転登録（前年比+24.0%）は前年同月を上回った一方、振込口座振替（同△7.1%）は前年同月を下回った。



(注) 1. 1営業日平均。

2. 手形交換高（東京）、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

#### 5. 資金需給、金融調節

7月の資金需給をみると、銀行券要因が4,552億円の余剰（前年同月6,762億円の余剰）となった一方、財政等要因は、夏季ボーナスにかかる源泉所得税を中心とした税揚げ等から9,425億円の不足（同1兆7,865億円の不足）となった。こうしたことから全体では4,873億

円の不足（同1兆1,103億円の不足）となった。

こうした状況下、日本銀行は手形買入れ等により資金を供給した。

8月の資金需給（国債発行織り込み前）を窺うと、銀行券要因が7月支給の民間ボーナス支払資金の還流が見込まれることから、月中6,000億円程度の余剰（前年同月9,216億円の余剰）となる見通しであるほか、財政等要因も、受入面で夏季ボーナス等にかかる源泉所得税を中心とする税揚げ等が見込まれるものの、支払面で国債償還、国民・厚生年金の定時払い等が嵩むことから、3兆100億円程度の余剰（同3兆818億円の余剰）となる見通しであり、全体では3兆6,100億円程度の資金余剰（同4兆34億円の余剰）と予想される。

#### 6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

6月のM<sub>2</sub>+CD平残前年比伸び率は+1.5%と前月に比べ0.2%ポイント低下した。通貨種類別にみると、準通貨の伸び率が上昇した一方、CDの伸び率が低下した。また、広義流動性の平残前年比は+3.0%と前月と同じ伸びとなった。

7月の銀行券平残前年比は+4.9%と前月（+4.3%）を上回る伸びを示した。

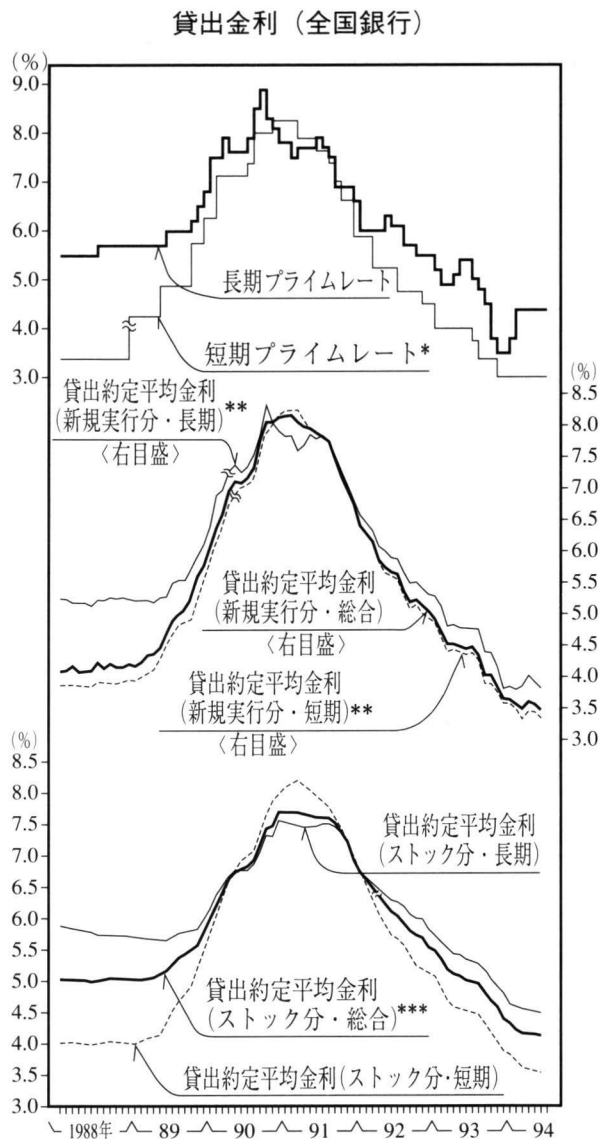
7月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残（実質預金+CD、都銀、地銀、地銀Ⅱ）前年比は+1.6%と前月比上昇した。また、総貸出平残（都銀、長信、信託、地銀、地銀Ⅱ）前年比は△0.4%と4か月連続で既往ボトムを更新した。

## 7. 貸出・預金金利

6月中の貸出約定平均金利（全国銀行）をみると、新規実行分については、短期、長期とも2か月連続で低下したことから（短期：前月比 $\Delta 0.086\%$ 、長期：同 $\Delta 0.104\%$ ）、総合でも2か月連続で小幅低下した（同 $\Delta 0.083\%$ 、総合：5月 $3.552\%$ →6月 $3.469\%$ ）。

また、ストック分については、短期、長期、当座貸越、総合ともに引き続き低下傾向を持続し（短期：前月比 $\Delta 0.027\%$ 、長期：同 $\Delta 0.033\%$ 、当座貸越：同 $\Delta 0.027\%$ 、総合：同 $\Delta 0.033\%$ ）、既往ボトムを更新した（総合：5月 $4.153\%$ →6月 $4.120\%$ ）。

この間、6月の定期預金金利（自由金利分、3か月以上6か月未満の全銀受入金利平均）は前月比若干低下した（5月 $1.999\%$ →6月 $1.961\%$ ）。



(注) \* 1989年1月以降は都市銀行の中で最も多くの銀行が採用した金利。

\*\* 1990年4月以降は地方銀行Ⅱを含む。

\*\*\* 1992年4月以降は当座貸越を含む。

(調査統計局)